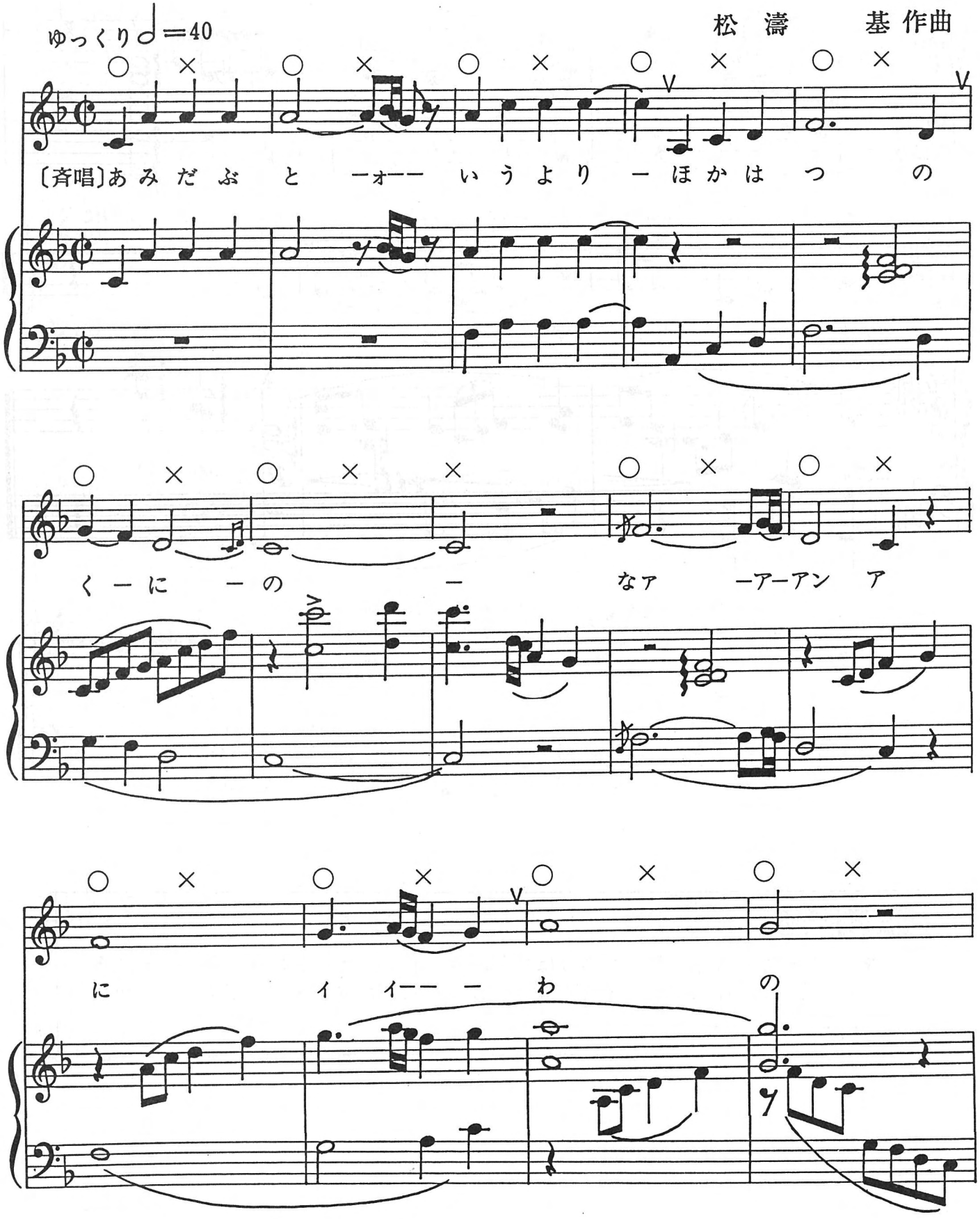
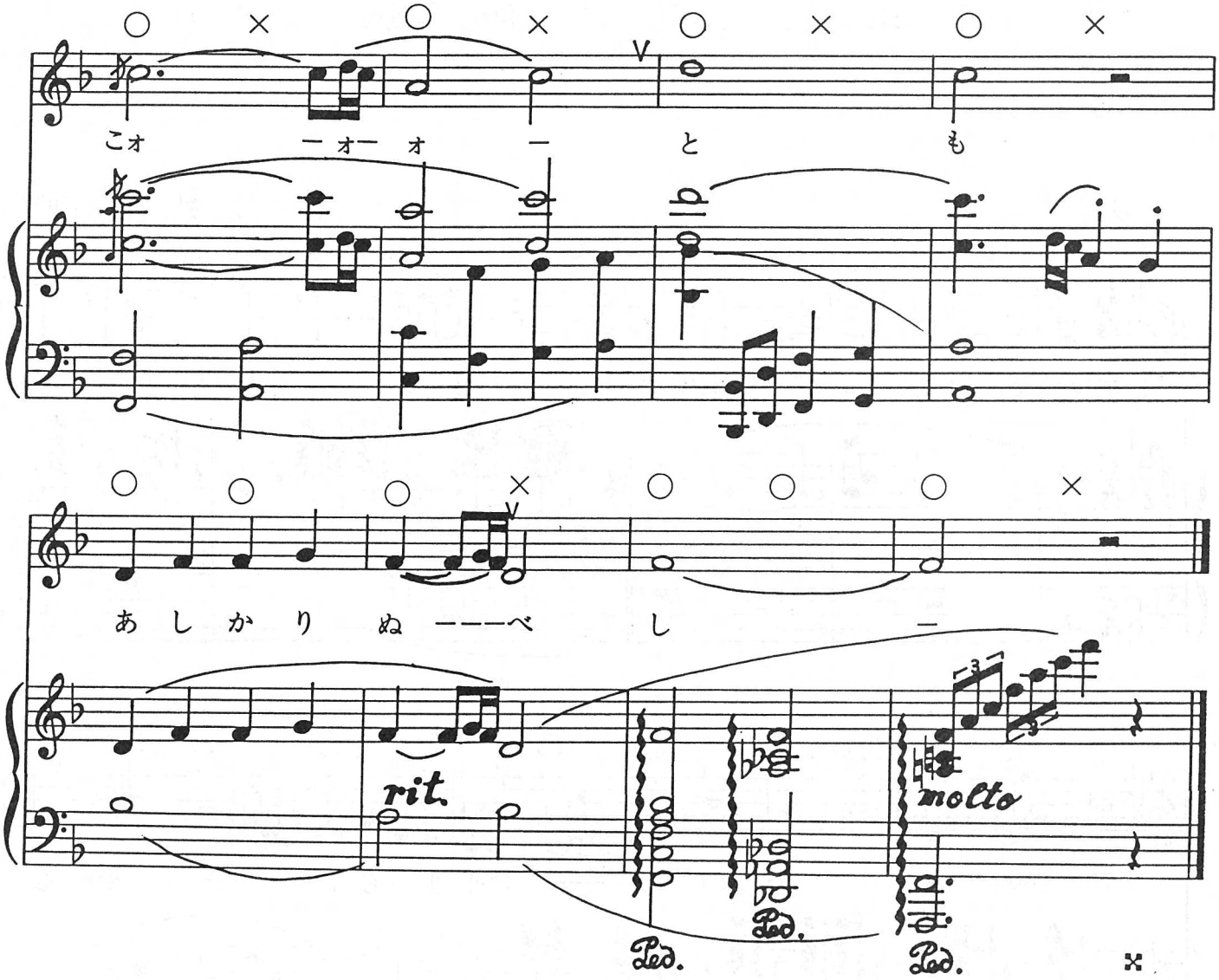
第七番　一心寺の御詠歌（専修調）

（歌詞は３０ページ）

ポイント注意　２拍子の曲です。

- 「あみ」が強声、「だぶ」が弱声です。
- 「いうより」の「り」のタイを大切に。
- 「こォーーとも」の「こォ」の立ち上がりを大切に

第七番　摂津の国　逢坂　一心寺

「極楽往生の行業には余の行をさしおきて
　　たゞ本願の念仏をつとむべしといふことを」

阿弥陀仏と　いふよりほかは　津のくにの　なにはのことも　あしかりぬべし
（法然上人御作）

法然上人は四天王寺の西門の近くに四間四面の草庵を結び、「荒陵（あらはか）の新別所（しんべっしょ）」と名づけ、はるか難波の海を見下し、美しく輝く太陽が西に沈むのをご覧になり、西方極楽浄土に思いをよせ日想観（にっそうかん）を修し、至心にお念仏をされたのであります。後白河法皇もここを訪れ、上人と共に日想観を修せられました。この草庵が、現在の一心寺の開創となったのであります。摂津の国難波の浦は葦の名所と言われています。「なには」とは「何事」という意味にかけ、「あし」を「葦」と「悪し」とにかけ、巧みな表現でつづられています。

題意　極楽浄土へ往生するための行は、ただ阿弥陀さまが本願として誓われたお念仏の行だけで、その他の行は何もいりません。専修念仏（せんじゅねんぶつ）一行のお歌です。

大意　西方浄土へ思いを寄せる者は、ひたすらにお念仏の行だけに励みなさい。お念仏の行以外の行は、葦を刈るという言葉のように、往生のためには悪しき勤めとしてさしおきなさい。

（楽譜は２０ページ）